

金沢駅から4分の築100年の古民家に 本格的な現代アートギャラリーがオープン！

批評家・石川嵩紘によるギャラリー「Ishikawa, Ishikawa」、こけら落としは梅津庸一展



1. 梅津庸一《もしもあの頃に戻れたら》2014, 2026年

開廊記念展

梅津庸一展

ありえたかもしれない正解への遡行

会期

2026年10月30日（金）

-11月30日（月）

会場

Ishikawa, Ishikawa

金沢市芳斉1丁目4-28

In Kanazawa House内

開廊時間 13-18時 休廊日 月・火・水曜日（11月30日は臨時開廊） 金沢駅から車で4分・徒歩15分

概要

批評家・キュレーターの石川嵩紘は、石川県金沢市芳斉にて現代アートギャラリー「Ishikawa, Ishikawa」(イシカワ・イシカワ)をオープンいたします。

金沢は、21世紀美術館をはじめ多くの美術館がある美術への関心が高い都市です。しかし、東京や京都に比べると現代アートギャラリーの数は多いとはいえません。美術館は作品を次世代に継承する場所ですが、現代アートギャラリーは新しい文化が生まれ、作家が輩出される現場です。最先端の現代アートはもちろん、パンデミック以降変化し続ける社会の同時代性を感じさせる作家を紹介していきます。

このギャラリーは、第17回『美術手帖』『芸術評論募集』佳作を受賞した批評家で、これまでもさまざまな展覧会を企画してきたキュレーターの石川嵩紘がオーナーディレクターを務めます。批評的な視点をもった意欲的なプログラムを予定しています。来年初頭には『芸術評論』の受賞作で論じた「生活陶芸(工芸)」をテーマにした展覧会も開催予定です。

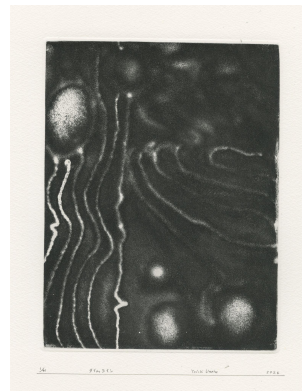
開廊記念として梅津庸一展「ありえたかもしれない正解への遡行」を開催します。現代アートのシステムのなかに独自の価値体系を打ち立ててきた梅津のキャリアを振り返りながら「作家性のIF(もしも)」を考えます。会場限定で1万2000字の対談テキスト「梅津庸一×石川嵩紘 対談 凡庸さを受け入れる」を特別配布いたします。

ギャラリースペースは、築100年の古民家の蔵を改装したものです。株式会社こはくが運営する金沢の文化体験を提供する「IN KANAZAWA HOUSE」内に所在し、戦火を免れた金沢だからこそ残る町家の佇まいを生かした空間が誕生しました。金沢駅から車で4分・徒歩15分という好立地であり、石川県内の美術ファンはもちろん、全国からも気軽に足を運んでいただけます。

展覧会出品作品 (P.1も含む)



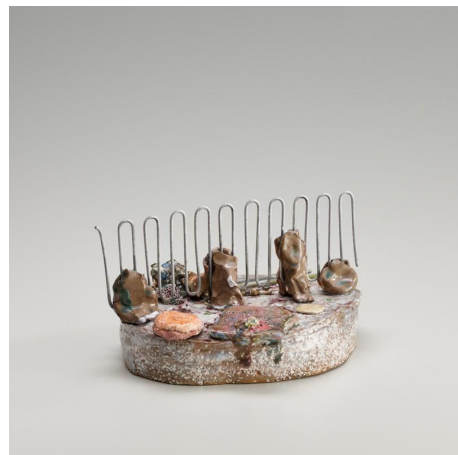
2.梅津庸一《心と物質》2025-26年



3.梅津庸一《タイムライン》2026年



4.梅津庸一《地盤沈下》2025年



5.梅津庸一《プラント》2025年

ギャラリーディレクター・ステートメント

想像できない未来は、過去の選択がつくった未来なのだ。

「Ishikawa, Ishikawa」開廊に寄せて

いつかは自分のギャラリーを持てたいと思っていた。それが今というのが遅かったのか早かったのかはわからない。しかもその場所が、人生の大半を過ごした東京ではなく金沢になるとは、想像もしていなかった。

コロナ以降、個人的にいろいろなことがあった。いいこともあったが、頭をよぎるのは反省と申し訳なさばかりだ。この文章を書いている今も悩んでいる。それでも、自分にできることを精一杯やるしかないと思い、ギャラリーに挑戦することにした。

話は変わるが、現代美術は東京に集中しすぎているかもしれない。六本木、天王洲、馬喰町を回れば、いまの現代美術はひととおり見渡せる。そのせいか、現代美術に関わるなら東京にいないかならないような錯覚さえ覚える。けれども、そうした場所でギャラリーを構えることに現実味を持てなかった(そんなお金もない)。

自分と現代美術の関係を振り返ってみると、原風景にあるのはいわゆるゼロ年代のギャラリーの姿だ。マンションやアパートの一室で、作家もギャラリストも観客も近い距離で作品を囲み、熱く言葉を交わしていた。ああした「何かが起こりそうな」マジックを、自分の手で生み出してみたい。だから中心地にこだわる必要はないのかも、と思った。

金沢は文化の厚い街で、伝統を大切にすると土地柄と言われる。しかし、実際に暮らしてみると新しいことへの関心が強く、協力を惜しまない方が多いことに気づかされる。そうした方々がいるなら、種を撒き続ければきっと芽は出る。観客をゼロからつくっていく覚悟でいる。

僕はコレクターであり、画商でもある。もとは日本画を描いていて、少し前までは美術館の学芸員でもあった。そして、最近は批評を書いている。先日、第17回『美術手帖』『芸術評論募集』で『リバース・オリエンタリズム』から見た生活陶芸 現代美術という帝国に向かう周縁』という論文で佳作をいただいた。もともと文筆の仕事はたまに受けていたが、これをきっかけに批評を書く機会が増えて嬉しく思っている。

批評とは、言葉によって作品や活動に新たな輪郭を与える行為である。批評家がギャラリーを営むとなれば、批評が商売道具になると危惧する人もいるだろう。ただ、その心配は批評が大きな力を持っていることを前提にしている。実際には、作品の「評価」はいまや批評より市場で決まることが多い。それでも批評が要らなくなったわけではないだろう。言葉がなければ、作品の価値は値段でしか語られなくなるからだ。批評が後退したのは、その形式が硬直し、複層化した社会を捉えきれなくなったからだと思う。だとすれば、価値が実際に決まる現場の内部に立つことで、批評はもう一度説得力を持てるかもしれない。先の論文も、さまざまな現場を渡り歩くなかで考えてきたことをまとめたものである。これからその姿勢で物事の価値を問い続けるつもりだ。

こけら落としの展覧会は、梅津庸一さんの個展だ。梅津さんの美術への問題意識には自分と重なるところがあり共感できるのだが、何より重要なのは僕が梅津さんの作品を好きだということだ。こうした作家に出会えたことこそ自分が現代美術を続ける理由にほかならない。

個展「ありえたかもしれない正解への遡行」は、デビューから20年以上を経た梅津さんのキャリアを少し違う角度から捉え直す展覧会である。後述する書籍に収めた評論で、梅津さんの創作の来歴を「開発」と「設計」から読み解いたことが、本展のテーマの出発点になっている。梅津さんにとって作品は自らの感性を燃料に動く機械のようなもので、それをエンジニアのように組み上げていく。一つのモチーフを発展させ、枝分かれさせていくのが「開発」。ドローイングの造形や色彩を陶芸などほかのメディウムと掛け合わせ、新たな系統を生むのが「設計」だ。会場に並ぶのは、ドローイングの亜種としての陶芸、あるいは陶芸の亜種としてのドローイングなのかもしれない。

そして、個展にあわせて、梅津さんについて僕が書いた評論「ケアとフェア」と長大なインタビュー、図版を収録した書籍も出版される見込みだ。書籍のタイトルも、個展と同じ名前がついている。梅津さんを知る入門的な一冊であり、自分にとって思い入れの深い本になった。本のデザインは、詩的ですがらしい装丁を手がけるサイトラヒデユキさんをお願いした。ギャラリーのロゴも、サイトラさんの手によるものだ。オープニングには間に合わないが、会期中に出版することを目指している。出版社は『ラムからマトン』のアートダイバーである。

このタイトルが示唆しているのは、作家がたどりえたもう一つの道筋、オルタナティブな可能性である。思い起こされるのは、奈良美智さんが44歳のときに原美術館で開いた「From the Depth of My Drawer」(2004年)だ。あの個展もまた、「開かれていたかもしれない可能性」を見つめ直す展覧会だった。奇しくも梅津さんも44歳である。キャリアを積み上げてきた作家にとって、来た道を振り返り、分岐点を確認する時期なのかもしれない。

「オルタナティブな可能性」と書いたが、この言葉は近ごろ美術の世界でもよく目にする。けれども、それは本当にオルタナティブなのだろうか。オルタナティブ・ロックがいつしか主流に呑み込まれていったように、言葉だけが形骸化していく危うさを感じる。このギャラリーでも、オルタナティブな切り口で展覧会を企画することがあるかもしれない。その時は、言葉ではなく中身で示していきたい。ともあれ、自分の過去にもオルタナティブな「正解」はあったのだろう。それでも、選択を重ねた末にいま金沢の地に根を下ろしているのだから、その意味はこれからの活動のなかで見えてくるはずだ。

梅津さんはよく「自分の人生を費やしてきた現代美術がつまらないものであってほしくない」と口にする。僕も同じ気持ちでいる。

2026年10月 石川嵩紘

梅津庸一 ステートメント

ありえたかもしれない正解への逆行

梅津庸一（美術家、パーブルーム主宰）

「もしもあの時こうしていたら」

誰もが一度は思ったことがあるはずだ。僕はわりと頻繁にそうした後悔が脳裏をかすめる。もっとも、そんなことを考えても過去に戻るなどできないのだが。

では、作品の場合はどうだろう。「あの時こうしていれば」という後悔を抱えた作品は案外少ない。完成した作品とは、制作当時の逡巡と決断の総和であり、終わり方は作者自身が決めるものだ。また、そもそも作者にとっての本当の意味での失敗作が世に出ることはない。とはいえ、制作において小さな思い残しは無数にある。ひとつの道筋を選ぶことは、他の分岐を潰す行為にほかならないからだ。

だが、選ばれなかったルートが完全に途絶えるわけではない。作品がひとつのプロダクトとして完結しても、異なる作品で同じ課題を引き継ぎ、別の方法を試すことはできる。その意味で、作品制作とは、人生における「取り返しのできなさを和らげる麻酔のような側面を持っている。また、作品は作者の生き写しでも所有物でもなく、ひとときをともに過ごした後は、それぞれ別の時間を生きていく。

本展は、そうした作品に記された「ありえたかもしれない分岐点」へと逆行し、別の道を歩み直すような想像力を働かせて編まれる。

通常、展覧会とは既存の展示室に作品を配置してつくられるが、今回は新しく開業するギャラリーということもあり、スペースができる前から構想を練る必要があった。いわば、普通の蔵がギャラリーに変容していく過程と歩調を合わせながら企画は進んでいった。作品を選定し、過去の分岐点を踏まえた新作も次々に加えられた結果、実際のスペースには収まりきらないほどの数の作品が用意された。

本展では、主題、形式、様式、年代といった項目に基づいた体系的な分類よりも、作品間をまたいで引き継がれてきた造形の因子の流れが優先される。それらをあらためて繋ぎ直すように再編する。

わかりやすいキャッチコピーや主題に埋もれがちな「つくる」に潜む「開発と設計」の原理を提示したい。旬の社会問題やトピックを図解し啓蒙するのではなく、今一度「美術の専門性とは何か？」を身をもって考えたい。

梅津庸一 略歴

1982年山形県生まれ。美術家、パーブルーム主宰。日本の美術教育の出自を起点として、美術制度と歴史を問い直す批評的な作品を制作。絵画、陶芸、版画、映像に加え、批評やキュレーションも手がける。また、イオン海老名にてパーブルームギャラリーを運営している。

主な個展に「梅津庸一 クリスタルパレス」（国立国際美術館、2024）、「梅津庸一展 ポリネーター」（ワタリウム美術館、2021-22）。主なグループ展に「表現者は街に潜伏している そして、ショッピングセンターは街そのものである」（パーブルームギャラリー、2025）、「梅津庸一キュレーション展 フル・フロンタル 裸のサーキュレイター」（三越コンテンポラリーギャラリー、2020）。著書に作品論集『ラムからマトン』（アートダイバー）、作品集に『クリスタルパレス』（ライブアートブックス）、『梅津庸一作品集 ポリネーター』（美術出版社）。

ギャラリースペースについて



築100年の染物工場を改装した古民家に隣接する蔵をギャラリーに改装した。昔、この蔵は絵描きのアトリエになっていたそうで年月が経ち再び美術のために使われるというのは不思議な縁を感じずにはいられない。8年前、建物は金沢の文化体験施設IN KANAZAWA HOUSE」としてリノベーションされ、現在は人と文化をつなぐ拠点となっている。歴史ある空間を生かし、工芸・食・芸能など、この土地で受け継がれてきた文化とその担い手に出会える機会を設けてきた。地域の文化を次世代へつなぐとともに、国内外から訪れる人々との交流を通じて、新たな価値が生まれる場を目指しているという。株式会社こはくの山田滋彦さんは、時代を超えて受け継がれてきた町家の再生に取り組んできた方だ。自分の現代美術への思いを理解してくださり、蔵を使うことを許してくださった。世界から人が訪れるこの場所の特性も生かして、グローバルに開かれたギャラリーにしていきたい。

ギャラリースペースの施工は、現代美術家でアーティスト・ユニット鯨のメンバー、展示設営者の森山泰地さんが滞在しながら丁寧に手がけてくれた。このスペースは、森山さんの作品でもあるように思う。

ギャラリー名「イシカワ・イシカワ」について

Ishikawa・Ishikawa



Ishikawa・
Ishikawa

「石川県の石川だから」というわかりやすさを込めて名付けた。ロゴをデザインしてくださったサイトラヒデユキさんと、高円寺の沖縄居酒屋で飲んでいるときに出てきた名前なのだが、ちょっとまぬけな響きが自分らしくて気に入っている。蔵の意匠を活かしながら、ギャラリーにふさわしいニュートラルなロゴとなった。

ギャラリーディレクター 石川嵩紘

批評、展覧会企画。1985年生まれ。石川県金沢市在住。イシカワ・イシカワ ギャラリーディレクター。多摩美術大学造形表現学部造形学科日本画専攻卒業。これまで小山登美夫ギャラリースタッフ、三越コンテンポラリーギャラリーバイヤー、リコーアートギャラリーディレクター、国立工芸館特定研究員を務める。第7回『美術手帖』『芸術評論』佳作受賞『リバー・オリエンタリズム』から見た生活陶芸 現代美術という帝国に向かう周縁。『奈良美智オンラインカタログ・レゾネ』年表・展覧会解説執筆。『スローな復興 能登半島地震復興をスロー・ツーリズムから考える』（仮題）を桂書房より近日出版予定。

関連書籍

評論・作品集 梅津庸一『ありえたかもしれない正解への遡行』

- ・論考 石川嵩紘「梅津庸一論 ケアとフェア」
- ・梅津庸一インタビュー（聞き手：石川嵩紘）「梅津庸一の半生」「平成サブカルの残留思念」
- ・梅津庸一作品・展覧会図版多数掲載
- ・ウェブメディア『レビューとレポート』より梅津庸一関連のレビューを再掲
- ・デザイン サイトラヒデユキ
- ・仕様 B5変形 208ページ予定
- ・出版社 アートダイバー
- ・出版時期 2026年11月予定

詳細

ギャラリー名	Ishikawa, Ishikawa（イシカワ・イシカワ）
ウェブサイト	http://iskw-iskw.art/
ギャラリーディレクター	石川嵩紘
ギャラリー住所	〒920-0862 石川県金沢市芳斉1丁目4-28 IKH内 イシカワ・イシカワ
展覧会名	梅津庸一展「ありえたかもしれない正解への遡行」
会期	2026年10月30日（金）-11月30日（月）
休廊日	月・火・水曜日（11月30日は臨時開廊）
営業時間	13-18時
電話番号	080-3396-8487
メールアドレス	info@iskw-iskw.art（担当：石川）
本リリースに掲載されている画像	下記リンクよりダウンロード可能いただけます。＊クレジットリスト有 https://drive.google.com/drive/folders/1zC85dmHoST2kD0D8r-j5fdx2DBx6UjTN

ぜひ貴メディアにてご紹介くださいますよう、何卒お願い申し上げます。